

詩經に詠はれた自然界

目加田, 誠

<https://doi.org/10.15017/2556620>

出版情報 : 文學研究. 27, pp.59-94, 1940-07-25. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

詩經に詠はれた自然界

目 加 田 誠

詩經の詩の解釋に困難な一つの點は、所謂比興にとられてゐるものが、果して何を比喻し、又は何を象徴して、主題といかなるつながりを持つてゐるかの問題である。之が明らかでない爲めに、色々とその間に牽強附會の説が入り込む餘地が存する。思ふにそれらの比興は、古代の人々にとつては、極めて身近い、生活に密接な關係をもつ事物を無雜作に用ひたものに違ひない。彼らをとりにまく世界が、彼らに對して有つてゐた所の意味をよく考へなければ、後世の人にとつて、それらの比興は殆ど了解しがたいものになつて了ふであらう。其の結果、徒らに後世の臆測を以て、何らかの解釋をそこに押し付けやうとすることになるのである。こゝに私は、古の人々が、彼らを取りまく自然界に對して、どのやうな感情を以て見てゐたかを少しばかり考へて見度い。

詩經の中には、動植物の名が非常に多く出て來る。論語に、詩を學べば多く鳥獸草木の名を知ると云つてゐる程であるが、同時にその言葉は、已に其の時、詩が折衝尊俎の間の具となつて、曾つては生き／＼とした目前のものとして風人の比興に用ひられた自然界の事物も、當時已に一般知識階級の人々にとつて、可成り縁遠いものになつてゐたものだと考へられる。呉の陸璣が毛詩草木鳥獸蟲魚の疏を書き、後には蔡汴その他の學者が詩の名物を考へたが、尙一々の名稱の實物を確知することは容易でない。以下述べる魚鳥草木の名も、遂に果してそれが如何なるものとも

決し兼ねるものが多い。若しもそれらを一々明にする事が出来たなら、夫れ丈けでも今少しは古への人の心持ちに近づくよすがとならう。古の人にとつては、野の草も、空とぶ鳥も、まことに彼らの生活に密接に入り込んでゐたのである。素朴な心は自分をとりにまく周圍に對して、常に敬虔な、多くの神秘をこめた感じを抱いてゐたであらう。現に吾々のすぐの祖先たちも、殊にその田舎に在つた生活は、さまざまの神秘に充ちてゐたものゝやうに想像される。否現代の吾々に於ても、若し一度び幼い心に描いた夢を想ひ起せば、古代の人の素朴な心に通ずるものがひそかに胸に蘇るだらう。

天、日月星辰雲霓

古代の人の天に對する崇敬の感情については、已に學者によつて色々論じられて來た。私はこゝにそれを繰返さず、只詩經に現れた天に對する古代人の心持を擧げれば足る。詩に現れてゐる天は畏ろしいものである。絶對の力を持ち、人間の如何とも計りがたい畏ろしい力をもつ。茫漠たる北支那の野に立つて黄土を開墾して耕作に従事した農民の、幸も不幸も全く人爲を絶した天の力による。良き收穫は天の祐であり、飢饉も亦天の災である。周の天子は此の畏る可き絶對の天に、特に寵まれて天命を受けたといふところに其の支配權の神聖さを立てる。(蕩々上帝、下民之辟——蕩) 天子は天を祭り、その意を受けて民を治める。そこには絶對神聖なる權力と共に、民を養ひ育つ可き責任を、天に對して持つことを自覺する。支配者たる周朝は、常に心して天に順ひ、民を安んじて、民心を得てこそその地位を保ち得て、永く天命をその家に續けることが出来る。かくて天を畏れ、天命をつゝしむことを常に戒め

るのを忘れなかつた。(天命常なし——文王。天忱とし難し——大明) 且つ民を治めるについては、天が民を生じては當然そこに秩序あり法則ある可きものとして、そこに教を立て道をしいたのである。(天蒸民を生ず、物あれば則あり——蒸民)

かくして彼らが天の休(美)を何ひ、天の龍(寵)を何ひ、天の祐(福)を受け、天の祿を受けることを感謝する詩は、壯嚴なる祭祀の歌たる頌、及周朝建國の歴史と精神とを語る大雅の幾篇、それから曾孫(周の一族——領主)の收穫を祝ふ幾篇の歌(小雅信南山等)等に現れてゐるのである。

けれども所謂文武の聖世は知らず、事實はいつか王の無道、權臣の跋扈、次々に起つてやがて鎬京は滅んで東周に移る、打ちつゞく動亂に民は生くる道を失ひ、大旱、日食、飢饉は天の怒りとして人心を震悚させ、心あるものが爲政者の反省を促した詩は、之こそ小雅大雅の、ことに小雅の詩の大なる部分を占めてゐる。而も爲政者の失敗惡徳による天の罰は、當然その人の上にこそ降る筈であるのに、何故罪なきものが之程までに苦しまねばならぬのか。

天まさに薦に瘞ましむ。喪亂はなはだ多し。(節南山)

昊天備しからず。昊天平かならず。昊天惠ます。(節南山)

民今の祿なき、天天して椽なへり。(正月)

浩々たる昊天、其の徳を駁にせず、喪飢饉を降す。(雨無正)

悠々たる昊天は、あゝ民の父母とこそ。何ゆえ何の罪もなく、かゝる大亂に逢ふことぞ。昊天甚だ威るべし。我には何の罪なきを。昊天甚だ慚なり、我には何の罪もなきを。(巧言)

おそるべき上帝、その命よこしま多し。(蕩)

等の言葉は實に詩經の中にみちてゐる。雲漢の詩は朝廷に於て大旱を救はふとして天に訴へなげく詩である。

王曰く、あゝ今の人何の辜ありとて、天は喪亂を降し、饑饉しきりに臻れるぞ。

と同時に十月の交の詩は權臣皇父が王を蔑しろにして權をほしいまゝにし、政亂れ、日食現はれ、百川沸騰し、山冢率く崩れ、高岸谷となり、深谷陵となり、天變地異、交々現るゝとき、何故今の爲政者はその行を改めやうとせぬかと、皇父の罪を責めた詩である。

かゝる世にあつて、何ら力なき哀しき民は如何に世を過したか。訴へるすべなき心に、思はずり仰ぐ蒼空は、茫茫としてはてもなく、民の苦しみを知る有るか、知るなきか、計りがたい力をひそめてはるかに頭上を覆ふてゐる。人は天のなすところを如何ともする事はできぬ。悠々たる蒼天、いつか極ることあらん。(鵝羽)と嘆くばかりである。凡て天の所爲、たとへば良き人の無残に生き埋めされるを見ても、彼蒼たる天、我が良人を殲す(黃鳥)と悲しみ、貧苦にあへぐ生活苦も之亦、天實に之を爲せり、(北門)とあきらめねばならなかつた。

かくの如く、地上の人間の計り知られぬ力をもつものとして天を感じた古の人は、おのづから、天に人格的な主宰者の存在を考へてゐたのであらう。文王の詩の、「文王は陟り降りて、帝の左右に在します」、或は下武の詩の「三天に在はす」といふは、周の天子が、その特別なる天との關係によつて、その魂は天帝の左右にある事を云つたものである。闕宮の詩の

かゞやかしき姜嫄、その徳回ならず。上帝これに依りたまひ、いさゝかの災害もなく、月満ちてたがはず、后稷

を生み給へり。

は上帝の精靈が姜嫄といふ女性にやどつて周の先祖の後稷を生んだことを云ふ。然るに大明の詩になると、大妣といふ女性の立派さを讃へて、大邦子有り、天の妹に俛たふふといふ。更に君子偕老の詩になると、美人をたゞへて

玼あぶらなり玼あぶらなり雉の繪衣。黒髪は雲のごとく、鬢かみを用ひず、玉の耳だま、象牙の髪かき、額廣く色白く、いかで此は天か、いかで此は帝か。

といふ。美人を指して、天帝かと見まがふ意味である。此の時天帝は疾威の上帝（蕩）と畏るゝのでなく、此の世ならぬ美しさをも具ふるものゝ如くである。人間に超絶したものを感ずる時、この世ならぬ美しさも又附け加はり得るのであらうか。

支那の古に、天地日月星辰山川風雨を祀つたことは禮に記されて居り、古のそれらに對する崇拜を察する事が出来る。こゝには又詩經に現はれてゐるものだけを考へやう。朝日を迎へる祭りは禮に見えてゐることである。あらゆる萬物生々の姿を美しと見たと思はれる古代人にとつて、殊にさし昇る朝日の新らしく蘇つた新鮮さはその日毎のめぐみと共にまことにめでたく輝しいものである。

月のみちゆく如く日のさし出づるが如く、南山の壽いひながきが如く、鶯かけず崩れず、松柏の茂るが如く、つき／＼にいや穢けがきゆかむ。（天保）

羊のころもつや／＼かに、朝日さしそふ曜あややかさ。（蒸製）

ひんがしの日よ、姝かほきひとは……（東方之日）

離々ちりちりとなく鴈かりがねや、日もさし出づるあさばらけ。(匏有苦葉)

常に東から出て西に沈む、この太陽の一定不變さは、民の安心であり、又反覆常なき人の世に、人の心もかくてこそあらまほしきものと云はれやう。

日や月や、常に世を照しますに、かのひとのあゝ變り果てぬ。心定まることもなく、いかで我を見かへり給はぬ。

日や月や、常に世をおほひますに、かの人の、あゝ我をいつくしみ給はぬ。心定まることもなく、いかで我にはこたへ給はぬ。

日や月や、常に東より出づるに、かの人の、情のことばも給はらぬ。心定まることもなく、いかで我を忘らるゝ身となし給ふ。

日や月や、常に東より出づるに、父よ母よ、わが嘆きを見給ふか。かの人の心定まることもなく、いかで我を道なくあしらひ給ふ。

この一定不變さと、そのかくす所なき明るさ故に、又男女の誓ひの詞に引かれるのは古とても後世とても同じことである。

どうせ生きては添へずとも、死なば必ず同じ穴。このまごゝろを疑はゞ、輝く空の日をかけて。(大車)

然るに此の常ある可き太陽が、時として虧けること、之こそ驚く可く畏る可く、不祥極りないことである。古の人は人間の行爲が、直ちに天の現象に反應を現すものと考へた故に、一たび天日の虧くることあらば、必ず天に對して責任ある人の行爲に天道に外れるものがある證據として懼れたのである。

先にあげた十月の交の詩はそれで、

十月にかゝる、朔日辛卯。天に日は蝕けた。何といふ醜いさましさだ。月は虧け、日さへ虧けるか。今この民びとは、おゝ何といふ哀かなしさだ。

日月も凶を告げ、その行く軌道みちを失ふ。四方の國に政なく、その良き人を用ひもせぬ。かの月の虧けるのは、またその常でもあらう。今この日が虧けるのは、あゝ何といふよくないことだ。

さうしてこの忌しい現象は、一に皇父一味の惡逆によるとして之を責めたのであつた。この十月の交の日蝕は從來幽王の六年と推算されて疑なかつたものが、近來天文學上の精密な計算によつて、東周の平王三十六年の日食たる可きものとされ、且つその二三年前より月食がつゞいてゐる事が知られた。乃で月食は敢へて珍らしくないことゝされ、始終盈虚なき太陽の蝕こそ、特に醜なるものとして懼れられたのであらう。

月は如何であらう。月も亦恐らく古代の人にとつては、明るく朗かなものであつたと思はれる。夜の歌舞にも伴つたものと考へれば尙更である。上述「東方の日」の歌は、第二章に於ては「東方の月」とことばを換へて歌ふ。日も月に共に姝こころよきひとを興するのである。月出の詩は美しい。月によき人の麗うつくしさを興して、

月出でゝさやかかなり。よきひとのうるはしさよ。たをやかの姿よ。言こともなく心いためり。

月出でゝ牙かえたり。よきひとのうるはしさよ。なやましの姿よ。胸さわぎ心痛めり。

月出でゝ照れり。よき人のあかるき面輪よ。あでやかなの姿よ。うれたくも心いためり。

星——北支那は秋から冬にかけて空氣が乾燥して、空が底知れず澄み渡る。星斗燦然と輝く夜の空は一きわ美し

く、星も我國で見ると大きい氣がする。古、詩經の詩を生んだ人々の仰いだ夜空もやはりさうであつたらう。詩經には星が多く歌はれてゐる。それらは何れも美しい。東門の楊はその一つ。男女の逢引。

東の門の楊の木、こんもり茂つたその葉蔭。日暮に逢はうと云つたのに、もう明星がキラキラリ。

東の門の楊の木、こんもり茂つたその葉蔭、日暮に逢はうと云つたのに、もう明星がちろちろり。

星座の移動は農業の季節に關係あるが故に、農民の詩に星が屢ば歌はれるのも當然である。幽風の七月流火は、初秋大火が西にくだつて、やがて迫り来る北地の寒さに、農民の衣を授けることから此の長い歌が始まる。そして二章三章はこの七月流火の句を首に繰り返し冠らせて歌ふのである。定之方中の歌は、定星の南に中する時、土木を始め、楚宮を築くことを歌ふ。綢繆の詩は、良人に邂逅する宵、三星が天に輝く。之は同じ詩の束薪の句と共に、やはり結婚の季節にも關係して考へられるものかも知れぬ。そのほかにも星の歌はれるものはあるが、殊に農村の生活から星を歌つたものとしては大東の詩が著しい。

……天の河空にかゝりて、うち見れば光りわたれり。三隅なす織女の、ひねもすに七襄す。

ひねもすに七襄するも、織り返し章をも成さず。かゞやけるかの牽牛も、いたづらに箱を服けず。東に曉の明星。西に宵の明星。まがれるは兔網の、天畢行に施す。

南に箕はあれど、はた糠を簸あげもならず。此の方、斗星はあれど、酒挹まむ用にも立たず。南に箕かゝりて、その舌を引くにも似たり。北のかた斗星かゝりて、その柄をば西に掲げぬ。

織女の終日七襄の義は定かでない。或は一日に七次をゆくことゝいふ。天畢は兔網に似る。箕星はその形箕に似て、

舌を引くとはその四つの星の二つが、舌を引いて物を吞まうとする形といふ。この詩の最後の維北有斗、西柄之揭の句は、當時西人の飽くなき搾取に對する東國の人の怨みのことばとして解釋されてゐる。まことにこの大東の一篇は、西人の子が祭々たる衣服を着て、百官に用ひられ、酒に飽き、玉を佩びてゐるときに、東國の人が今は織る機もつき果て、尙も息ふ暇なき勞苦を念うて「潜として涕を出す」歌であれば、その解釋も當つてゐやうか。

同じ雲漢も、その歌ひ手の立場が異なれば、

見はるかす雲漢、天に章をしき爲せり。周王みいのち永く、いかで人を作さざらむ。(棧樸)

と、天に燦然たる星の列を以て、地に燦然たる法度文章をしくに比へた。周朝の雄大壯嚴なる氣魄に充ちた政治の構想と、その農民の偽らぬ感情とは、こゝでも明かな對照として見られるものである。

雲は云ふ迄もなく、何よりも農民にとつて耕作に必要な雨をもたらすものとして詠はれる。

空一面に雲同り、めでたき雪霏々と降る。春は小雨の降り添ひて、ゆたかにとほり、濕ひぬれて、我が百穀を生ひ出でぬ。(信南山)

興雲祁々(大田)とは雲の盛に興る形容である。鬢髮如雲(君子偕老)有女如雲(出其東門)祁々如雲(韓奕)は夫々黒髮の豊けさを、東門を出で、彼處にみる女の群を、或は諸娣の盛なるさまを云ふ。雲に雨露を施す恩ある故に、之を比興にとつては情知らぬ男のつれなさを反興する。英々たる白雲、彼の菅茅に露をく、(白華)は我を獨り打ち棄てるかのひとを怨む言葉となる。

だが之等のことは別段詩經の詩に限つたことでも無い。それよりも、もつと注意す可きは虹に關する考である。古

代の人が天の現象を人間の行爲に結びつけて考へたのは日食についても述べた通り、誰も知る所であらう。用じやうなことが虹についても考へられる。虹が出るのは、大氣中に雨氣をたゞへて、地上をむす水蒸氣が立ちのぼるところへ、片陽がさして、一とき美しい幻を空に現はす。漢人の説に虹は陰陽の精也（漢書天文志）虹は陰陽の交接形色に著る者也（藝文類聚引蔡邕月令章句）などゝいつてゐるのは、恐らくそれよりも古い虹についての考へにやや理論づけやうとしたのであらう。蝮蝮の詩に

虹が東に出るときは、指さすものは誰もない。をなごはいづれ嫁に出て、うちを離れてゆくものを。

朝から虹が西に出りや、朝の間雨はふりやまぬ。をなごはいづれ嫁に出て、うちを離れてゆくものを。

あの子のやうにそれなのに、男欲しいと思ふとは、みさを無いもの罰あたり。

と歌ふ。毛傳には夫婦禮を過ぐれば虹氣盛也といひ、朱子も亦虹は天地の淫氣なりと注する。この詩で見れば、虹を淫奔の氣の現れとして指す事を忌諱したものらしい。虹については後にあげる候人の詩と共に、已に聞一多氏の研究がある。氏は虹と、高唐神女の雲となり雨となつて楚の襄王の枕に侍らんと夢に現れるかの傳説と、それより諸國の高祿の話に及んで、面白い意見を述べてゐるのである。（清華學報第十卷第四期。高唐神女傳説之分析。又同誌第十二卷第三期に、陳夢家氏の高祿郊社祖廟通考の一篇あり。）更に氏の指摘するやうに、雨と農業、高祿の祀と一種原始宗教の禮俗としての男女の行爲、等、それからそれへと遡つてゆかれるものであるが、已にそれは本稿の域を越える。

山 川

下界を超越して巍然と聳ゆる高き山は雲を興し雨となつて、畑の農作を濕ほす。古山川を祀ることは亦禮に見えてゐる。詩經の般の詩は周の天子が山川を祭る歌である。天作の詩に、「天高山を作す。大王之を荒サマむ」と云ひ、その毛傳に、「天、萬物を高山に生ず。」といひ、鄭箋に「天此の高山を生じて、雲雨を興さしめ、以て萬物を利す。」といふのは何れもかゝる高山に對する崇敬を以て説明する。或は又崧高の詩の

大いに高き嶽たけ、いとおほいに天に至る。これ嶽神靈を降して、甫と申とを生めり。

の如く、周の翰たる申伯甫侯は、その先祖が高山の靈に出づるものとす。高き山を崇拜する氣持こそ、永く吾々の心にまで奥深く流れてゐるのである。山の神秘はそこに生ずる鬱蒼たる草木によつて深められる。そこは常に濕ふて、まことに生々の氣に充ちて居る故に、この上なきめでたきものゝ象徴となる。詩に山をいふ時、屢しばしばばそこに茂れる樹木をいつて、君子の榮えを祝する詞となる。

澗たにの水清く流れ、南山は幽かみく靜もる。竹の園の榮ゆる如く、松が枝の茂れるがごとく、はらからの、つどひむつみて、心違はむこともなし。(斯干)

は、君子の新らしき宮を造れるを祝した、恐らくは巫の歌でもあらうかと思はれる長い歌である。又屢しばしば

山によき卉木あり、これ栗、これ梅、(四月)

山に榛はしば、隰しほには苓あやぎ。床しきは西のよき人(簡兮) (隰とは山に對して低く濕へるところ)

山には茂る木、隰には葦華、子都にはあへず、この狂れ男に。(山有扶蘇)

南山に臺あり、北山に萊あり、樂しや君子。邦國の礎。(南山有臺)

南山に杞、北山に李、樂しや君子。民の父母、(同上)

終南山に榮ゆるは、條、梅(柑)。君出でませり。錦衣狐裘。かんばせはあかあかと。あはれめでたき君。(終南)

山に櫟の木、隰にはまゆみ。君は來まさせず、味氣なや。(晨風)

等、いづれもよき人を美することばとなる。されば又山有樞の詩の如きも、

山には樞、隰には榆、衣裳が有るのに身にも着ず。車もあるのに馳せもせず、おながら死んだら、人のもの。

の山有樞、隰有榆の興も只子有衣裳と有の語呂を合はせるだけでなく、物のめでたく豊かなることを意味する興と見る可きである。

又山を悠遠なるものとして、「南山の壽」なる詞は、上に擧げた天保の詩に見えてゐる通りである。

かくて山は尊く人の仰ぐもの、雲を興し雨を恵むもの、井木の美しく生育してめでたきものとされるときに、岩根

あらく、吹きすさむ風きびしき山は、あたかも暴虐なる爲政者を象徴するに最もふさわしいものであつた。

高く聳えた南山は、巖けはしくそゝり立つ。赫々たる師尹は、民の具に仰ぐところ。憂心は憐くが如く、戯談さ

へも敢へて云はれぬ。(節南山)

蓼莪の詩は時の政のけはしくて、我親を養ふことすらも出来ぬ人の子のなげきである。

あゝ南山はけはしくて、烈しき風は吹き荒るゝ。人皆生くる道あるに、我のみいかで幸うすき。

あゝ南山はきびしくて、烈しき風は吹きすさむ。人皆生くる道あるに、我のみ親を得養はず。

かくて又けはしき山に風吹き荒るゝは、無情なる人の心を怨むことばにもならう。小雅谷風の詩は朋友の道絶ゆと序に云ひ、朱子亦朋友相怨む詩といふも、矢張り邛風の谷風をもとゝした男女の歌として見る可きであらう。そのつもりで全篇の意を解釋すれば、

吹きやまぬはげしき風は、ふきつのでり雨さへまじる。恐懼つゝありしその日は、汝と我ひたに寄り居き。やうやくに安けき今は、うちすてゝ忘れしがごと。

吹き止まぬはげしき風は、吹き下し吹き荒るゝ。おそれつゝありしその日は、懐にわれを抱きし。やうやくに安けき今は、うちすてゝ忘れしがごと。

吹き止まぬはげしき風は、岩けはし山のいたゞき。草は皆うち枯れてゝ、木々は皆萎みはてたり。わがいたきなさを忘れ、些かの怨思ふや。

川に於ても、もとよりその滔々として盛にみなぎる流れのさまが、君子の榮えを象徴するに役立つた。(天保)しかし乍ら、正直に云つて、川に關することばの出る詩は、私には色々疑問がある。之は何か私の考へに、大きなものを見落してゐるのではあるまいか。先づ結婚を意味するときに、屢々川を渡るといふことばが出るのである。

匍に苦き葉のありて、渡りに深く水みちぬ。深くば腰をからげつゝ、浅くば裾をからぐとや。

水は渡りにみなぎりて、雉はしきりに鳴き呼ばふ。渡りみちても渡らぬは、ひとり夫よぶ雉の聲。

雛々となく鴈や、日もさし出づる朝ぼらけ。人もし妻をめとりなば、氷融けざる冬の間に。

あれ舟人がさし招く、人は渡れどわれ行かじ。人は渡れどわれ行かじ、共に渡らむよきひとを待つ。(匏有苦葉)
 いかにも之はグラネー氏の如く、春の川渡りの遊戯を以て説明しうるかもしれない。今一つ褰裳の詩もほど同様に考へられる。

可愛がられりや手に手を取つて、裾をからげて溱わたる。可愛がつてもくれぬなら、ほかに男が無いものか。え、ま、この悪性もの。

可愛がられりや手に手をとつて、裾をからげて溱をわたる。可愛がつてもくれぬなら、ほかに男が無いものか。え、ま、この悪性もの。

之は鄭風の歌で、同じく鄭風に溱溱を歌ふものがあつて、

溱溱にみちた春の水。若者達や娘たち。苜とるにぎはひに。ねえ觀ませうよ。もうみて來たよ。あら、でも行つてみませうよ。溱水の外は、ほんとに廣々楽しいわ。そこで二人が、それ、ふざけ合ひ、かたみに贈る勺薬。(溱溱)

初學記に韓詩章句を引いて、「鄭國の俗、三月上巳、溱溱兩水のほとりに於て、招魂續魂し苜を執つて不祥を拂除す」とある。太平御覽に引く韓詩の文又意味は同じ。春になり、氣爽やかになると共に禊をして穢れた氣を除くのである。周禮にも女巫が祓除釁浴のことあり、後世にも禊は正月、三月、或は七月八月などに行はれた記録が色々見え。後漢の蔡邕の禊の文はこの詩の文句を取つてゐる。西京雜記には三月上辰、池邊に出で、そゝぎあらひ、蓬餌を食つて妖邪を祓ふとあり、かゝる時色々まじなひの藥草を采る。(この詩の苜も勺薬も何かそのやうな意味をもつものと思はれる。) 三月の禊は、やがて曲水流觴の宴となる。グラネー氏が古の禊の時の、男女の楽しい川渡りの遊戯

を、之らの詩にあてゝ考へてゐる事は尤ものやうに見える。

「鄭の春の祭禮。鄭の國では大勢の若い男女が、溱水と洧水との兩河の合流點の近くに集つた。彼らは其處へ蘭を摘みに隊をなして來、唱和歌で挑戦し合ひ、それから裾を褰けて洧水を渡つた。そして之ら若い男女が夫々相結ばれるに到つたならばこの新しい戀人たちは、別れる時に愛の記念や婚約のしるしとして、相互に花を贈り合ふのであつた。贖罪、種々な祓ひ、花摘み、川渡り、唱歌の競争、性的儀禮、約婚と云ふやうなものは、鄭では全て山川の春の祭禮に結び付いてゐたやうに思はれる。」(支那古代の祭禮と歌謡。内田智雄氏譯)

けれども私にはもつと川を渡る事に別な意味をもつものゝやうに思はれるのだが。たとへば氓の詩、(氓は衛風。匏有苦葉は邶風。共に衛國の詩。)に

桑の葉が一度散り出すと、黄色く凋んで隕ちてゆく。あなたに嫁いで、三年の間、食べるものさへない暮し。みなぎる洪水にひたひたと、車の垂れまで漸して來たが。女心は只一すぢ、男心こそ定めぬ。うつろひ易く、あてもにならぬ男のまこと。

この詩は長い／＼歌である。始め何處の誰とも知らぬ他郷の男が布と絲を貿へに來て、之に誘惑されて遂に他郷に嫁いだものが、やがて男に棄てられて、怨み哀しむ歌である。こゝに洪水湯々として車の帷裳を漸すとは、又結婚に因む川渡りのことに關係することばらしい。或は察すれば川を越えて、よその部落に嫁いでゆく意味がいはれてゐるのかも知れない。試みに竹竿の詩を見ると

すんなり細い竹竿で、魚を釣いたや洪の川で、君を戀しう思へども、遠く離れてすべもなや。

北に出でたる泉源は、南洪水に流れ入る。女子はいづれ家を出て、よそに嫁いで行かうもの。

洪水は南、泉源は、北より出で、流れ入る。いとしいひとの笑ひ顔、佩びたる玉の美しさ。

之も普通に、異國に嫁した女の、故郷を思ひ、洪の川に釣した楽しみを想ふ歌と解釋するのであるが、實は郷を距れた男女の思ひであらうと思ふ。(釣魚の事後述)かの溱洧の邊りに蘭をとるを觀る(この觀は社を觀るの觀と同じ)といふ歌は成程春の水遊びと考へられやうが、その他上述の諸詩は川渡りがもつと違つた意味のものとなつてゐらしいのである。

江有汜の歌は舊説には「媵を美する」詩といふが、之は己れに背いた愛する人の事を云ふものかと思へる。漢廣の詩は樵歌の類であらう。

南に高い木があれど、行つて休まうすべもない。漢のほとりに娘はぬれど、行つて求めるすべもない。漢は廣うて泳つて行けぬ。江は永うて筏でゆけぬ。

之と同じやうであるが、非常に解りにくい詩は兼葭の詩であつて、序には秦の襄公が周の禮を用ふる能はざるを刺るといひ、周の道を(毛傳)、或は周の禮を知る賢人を(鄭箋)求めることを云ふと解釋し、朱子はその指す所を知らずとするものである。たゞその詩句をそのまゝよめば

芦の葉は蒼々として、白露はいつかをく霜。あはれわがおもへる人は、大かほの水の彼方に。川のぼり行かむとすれば、道とほく至りもやらず。川わたり行かむとすれば、まのあたり水のさ中に。

この宛在水中の句は第二章に於ては宛在水中坻（中洲）、第三章は宛在水中沚（なぎさに）となる。この句が解らぬ。たゞ面影を水の上に見るころであらうか。さう考へるのは美しい。面白いのは漢廣の詩に於ける三家詩の説である。韓詩外傳には孔子と子貢が阿谷の處女に出逢ふ話にこの詩を引く。又列仙傳では、鄭交甫といふ者が、江漢の涓に於て、二人の神女に出逢ふ話になつてゐる。この漢水の神女の傳説は、易林、文選稽康琴賦の註に引く韓詩薛君章句でも同様である。楊雄、張衡、王逸などもこの傳説を時に引き又は暗示してゐる。曹植の有名な洛神賦に、「感交甫之棄言兮、悵猶豫而狐疑」といふ文句があつて、洛神賦の着想も、亦この邊に關係ある事を知る。果して漢廣の游女を神女、水仙とすれば、南有喬木の喬木も何か神木となつて、神木には近よれず、漢水に水浴びする仙女は求められぬことになつて、叶はぬ思ひを興することにならう。だがよしその三家説を認め見ても、同じく水仙の考を兼葭の詩にもつて來るのは無理かと思ふ。所謂伊人、在水一方の句がそれには適しくあるまい。そして之らの詩はやはり川を渡つて女を求めゆく意味の歌と見た方がよいのではないか。

草 木

樹木に對する宗教的な感情も當然考へられることである。甘棠の詩は特にその蔭に召伯が舍つた所であるが故に、「剪る勿れ、伐る勿れ」と尊んだものだが、その中には多分に神樹としての感じがある。又漢廣の詩の、南有喬木、不可休息の喬木も疑ふ人があることは上に述べた通りである。社に夫々の地に適した木をうるるといふ事も、本來樹木に對する信仰に關係しやうか。孟子に「所謂故國とは喬木有るの謂に非る也云々」といふのも、やはり社に尊崇

される喬木のことを指して云つたものと思へる。

詩經に出て来る樹木の名は色々多い。松柏を始め、棠、杜、榛、栗、樞、榆、漆、桑、栲、櫟、楸、棫、楊、梅（楸又は相）、李、桃、杞、檉、楮、檀等が思ひ浮ぶが、美しく繁る樹木は常に君子の美を興し、その繁榮もて君子の繁盛を比へる。先にも「べた山有嘉卉。侯栗侯梅。或は山有榛。隰有苓。或は南山有臺。北山有萊の形となつて常に君子を興するものである。

草も亦その緑に茂る有様が常に君子の美を興するに用ひられる。淇奥の詩は緑竹猗々たるを以て匪たる君子を興してゐる。此の緑竹は毛傳によれば緑は王芻（爾雅、大學に菘に作る）竹は篇竹（爾雅に蕭蓄、韓詩に竹を薄に作る。薄は篇筑）和名にはやなぎと云ふとか。水經淇水の注に、今淇川を通望すれば唯王芻編草毛の興せしに異ならずといふ。しかし之には疑問があつて、史記には淇園の竹といひ、漢書にも淇園の竹を伐つて矢百餘萬を作つたといふ。現に衛風竹竿の詩は籊々竹竿、以釣于淇とあつた。釣竿になるのはどうも竹でなければ工合が悪からう。竹の少ない北方の學者が緑竹を殊更に王芻と篇筑の二つに分けて考へたのであらうか。と容齋隨筆には云つてゐる。朱子は之を竹に解してゐるのである。

青々者莪の詩も青々と茂る莪の美しさを以て君子の儀（莪、儀同音）有るを興する。

青々と茂る莪は阿の邊に。逢ひまつる君は樂しく儀ありて。

青々と茂る莪は水の邊に。逢ひまつる我心こそうれしけれ。

之を以てかの有名な蓼莪の詩も亦考へてみる事が出来る。蓼々者莪、匪莪伊蒿。次に蓼々者莪、匪莪伊蔚、といふのは、諸説まち／＼で定まらぬ文句であるが、恐らく莪の春に生ずる、菁々として美しく、次第に老成して秋になつては遂に役にも立たぬ醜い草になつて了ふ事を以て、父母の深い恵みに生長した子供の、遂に期待に背いて、物になりえず、親を養ふことも出来ぬかなしみを歌つたものであらう。

莪すく／＼伸びゆけば、いつか醜ぐさはけぐさ。いたまし父母は我を生み、かくもわづらひ給ひしを。
といふ事になるであらう。隰有長楚の詩もこの考によつて新に讀みなほせば、

隰にはいら／＼。見事な枝よ。若々しくてつや／＼かな。うれしお前にや主がない。

第一章は猗儺其枝、第二章は華。第三章は實となる。相知つた男女の喜び。朱子が草木には知覺なく、家室なく、従つて憂無きを美やむといふのはどうしても思ひすぎであらう。

生々として緑なす草木を美しとみて、人の容儀の美しさを、その繁榮を、その幸福を象徴するものとしたと共に、その濕ひを失うて、枯れしぼむ草木は、又不幸なる女、或はいたましい民の生活を興するにふさわしかつた。

谷間に生ふる推の、乾きしほれしはかなさよ。夫に別れし女には、嘆きのみこそはてなけれ。嘆きのみこそはてなきも、艱難にあへるきみ故に。

谷間に生ふる推の、乾きしほれしはかなさよ。夫に別れし女には、嘆きのみこそ音に出づれ。嘆きのみこそ音に出づる。仕合せうすき夫故に。

谷間に生ふる推の、乾きしほれしはかなさよ。夫に別れし女には、すゝり泣くよりすべもなき。噉り泣くよりす

べもなく、あゝ今はまたいかにせむ。(中谷有推)

何草不黃の詩は征役に疲れ苦しむ人の歌。

草として黄色く枯れぬはなく、日として進みゆかぬはない。人としてひきいだされて、四方の征役に率はぬはな

す。

草として玄く枯れぬはなく、人として衰れでないものはない。衰しやわれら征役人、ことさらに人ならずとする。

兕でもなく虎でもないに、はてない曠野をさまよひゆく。衰しやわれら征役びと、朝な夕なに暇もない。

毛深い狐は、深草の間を通ふ。あじろの荷車、大道をひたゆきにゆく。

花を歌の比興に出すことは必しも多くない。大體その古は花とても後世のごとき觀賞用の多種多様のものはない。た筈だから。詩中に見える花の名も、桃李、舜華、木槿、收、唐棣、常棣(唐棣と一なるべし。ゆすら梅の類か)茗、(のうぜんかづら) 荷華、蓂楚(蔓生、華ハ紫赤色)等僅かである。花はそのかどやかに咲き匂へる潑刺たる有様を以て、或は美しき人を、或は榮えたる一族を、或は盛なる將軍の車を興する。「桃之夭々、灼々其華」の歌は最も人の知るところであり、嫁ぎゆく若き女を象徴するに何よりも明るく健やかな美しさである。同じく何彼襪矣の詩に、

今ぞ襪なる唐棣の華、げにつゝしみ和ける王姫の御軍。

今ぞ襪なる華は桃李。平王の御孫と齊侯の御子。

魚釣るは、より合はせるつり糸に。齊侯のみこ、平王の御孫。

と高貴の結婚を祝する詞である。

常棣の華はかゞやかに咲きこぼれる。その盛なる様が比興にとられては

かゞやかに咲きあふれたる常棣（にはぎくち）、今の世に、あゝ兄弟（はちちち）にまされるはなし。（常棣）

と、兄弟心を一にして榮ゆる美しさをいひ、

かの盛なるは何。常棣の花。かの車は何。將軍の車。兵車既に駕し、四つの馬たくましく、いかで怠りあらむ、一月に三度捷たむ。

と、將軍の路車を美する。

皇々者華の詩は使臣を遣はす歌と思はれるが、その首に、

照る花は野にも澤にも。駒競ひ使ひは馳せつ。及ばざる身をこそ思へ。

といふのもやはりかゝる意味に於て興したものであらう。

花を以て美人を比へることは今も昔も變りはない。

咲いた木槿（ぎげひ）の花のやう、可愛い、娘と合乗りで、ゆけばゆら／＼玉かざり、あの美しい孟姜さん、ほんにきれいでみやびてる（有女同車）

となる。「東門之枌」は陳國の宛丘に舞ふ巫を歌つたもの、

よい日出てゆけ南の原で、麻をも績（いと）まで市（いち）に舞ふ。

よい日出てゆけ皆つれ立つて、そなたは菽（あまひ）の花のやう。呉れた山椒（しんじょう）一にぎり。（山椒は巫のもつて神を降すもの）
しかし云ふ迄もなく花はその明るく勢よく咲いたところが常に比興にとられるので、女人を比へるのもさうであ

る。雨になやむ梨花の風情、風なきに散る花の哀れさなどはこゝで想ひ出す可きでない。あくまで健康で素朴であるのは断るまでもなからう。されば桃園の詩も首は灼々たるその華と興し、次には昔せむなるその實と興し、終に其葉葉々ははと興する。「陽有長楚」の歌も、一章に猗儺あだたるその枝、二章に猗儺あだたるその華、三章に猗儺あだたるその實を云つて美しき人を興する。「裳々者華」も盛さかなる華ばかりでなく、滑なめなるその葉を併せて興する。花ばかりではないのである。屢々花と共に、その勢よき葉を、實を、並べて人の美を比へる。澤陂の詩も、

澤のつゝみにや蒲かぶはちす。美しいあのひとに、胸はいためど何とせむ。ねてもさめても手につかず。涙は流るほろ／＼と。

つゝみの蒲かぶや蒿あやこ、美しいあのひとは、すらりと高く卷ま(嬌)らしく、ねてもさめても手につかず。心くよ／＼するばかり。

つゝみの蒲かぶやはちす花、美しいあのひとは、すらりと高くふくよかに、ねてもさめても手につかず。ひとり枕に臥ふしまるぶ。

と、蓮の美しさと共に又蒲の葉の伸びた美しさをも併せていふ。(因にはすも第一章は荷、第三章は菡萏はつたん。芙蓉はふぶ渠すに就いては、莖こを茹、葉はを荷、苔こけを菡萏はつたん、花はなを芙蓉、實みを蓮、根ねを藕いもといふ) 第三章の碩大且儼げんといふ句も、儼げんは毛傳のおごそかでは通じないので、韓詩説によつて矯、重頤也、と解釋したのであるが、碩大の句は實は「すらりと高く」では當つてゐない。古の美人といふものは飽くまで健やかで立派な體格であつたのに違ひない。又女の美を歌ふに桑の葉のつやかさ、を以てするのも、女の仕事に結びついた、やはり若々しさ、みづ／＼しさの比へである。

大體草木にしても鳥獸にしても、古の人は、否我々の一時代前の人々までは、それらの一々についてずつと親しい關心を持つてゐたであらう。詩經の詩には一木一草の生態によつて興をとつてゐるものが多い。殊に多いのは蔓生の植物であり、喬木にまつはる蔦かづらは、君子の恩恵に依りつく者のさまに比へ、藤々とながり合ふ蔦の蔓は、一族から離れて只一人他郷にさまよふ孤獨の身を反興するに適しかつた。

南に樛木あり。つたかづらぞ曩ひたる。めでたき君子、福多かれ。(南有樛木)

兄弟は他人ならず、蔦女蘿、松に施ふにも似たるかな。(頰弁)

河の岸邊の蔦かづら、つながりのびて生ふれども、悲しき我はたゞひとり、兄弟遠く離れ來て、よそなる人を父と呼ぶ。父と呼べどもよそ人の、我に心をかけもせず。(葛藟)

又蔦の莖のどこまでも延びくゞてゐるさまを以て、徒らに月日の延びゆくをも興してゐる。

旄丘に、はへる眞葛ののびくゞて、叔よ、伯よ、いつまでかくて日を延ばす。(旄丘)

かうして考へてゆくと、若之華の歌も、周室衰へて云々の從來の説は本義でなく、やはり喬木にまとふ若の黄に咲き緑に茂るを見て、己れは却つて頼もしき男に離れて悩む、女の心を考へられるのである。

のうぜんかつら、黄色に咲けど、心憂ひて、胸いたむ。のうぜんかつら、その葉も緑、かくと知りなば、死ぬこそまさされ。

群羊やせて首太く、三つ星の影置にやどる。あはれ人こそ食みもせめ、飢をみてなむこともなき。

この最後の句は全く不可解に似てゐるが、群羊といひ、三星(綢繆の詩参照)といひ、置といひ飢といふ(魚の項參)

照)所から、どうしても男女の思でなければならぬ。

葛はその織維をとつて布に織つた。(葛草の詩のごとく)。女の手に親しいものである。従つて葛を采るのは、蕭トモつみ等と共に女のしわざ、その仕事の間に歌はれる歌としては

葛をとらうよ。一日あはねば三月の思ひ。

葛をとらうよ。一日あはねば三秋の思ひ。

葛をとらうよ。一日あはねば三年の思ひ。(采葛)

かうした歌や、又「草蟲」の「陟彼南山、言采其蕨」、或は桑中の「爰采唐矣、沫之鄉矣」、などの詩は「采苜」の歌と同じく、草つみの歌であらう。夫の留守をまつ女達のみに限らず、いつもさうした時には異性が歌の文句に歌はれるのは詩經の詩に限つたことではない。又采薇々々等の文句がいつか歌の歌ひ出しに、一つの型として用ひられて来たものかと思はれる。小雅「采薇」の詩の一、二、三章のはじめの繰返し「采薇、采薇、薇亦作止」。「采薇采薇、薇亦柔止」。「采薇采薇、薇亦剛止」の句、それから又「采芑」の詩の一、二章のはじめの繰返し「薄言采芑、于彼新田、于此中鄉」の句もさういふ型がとられてゐるやうに思ふ。でなければ、之らの興は、どういつて見ても多少牽強附會の感を免れないのである。

鳥 獸

麟をめできたきものとしては振々たる公子を

麟の趾、麟の定、麟の角、あゝ(麟止)

とたゞへる。鳳を瑞鳥としては

鳳凰鳴くや、彼の高岡に、梧桐は生ず、かの朝陽に。(卷阿)

と明君の盛世を謳ふ。

龍の旗、龜蛇の旗、龜はトにも使はれて靈物として見られたらう。鳥についても、商頰の、天が玄鳥に命じて、降つて商を生ましめた玄鳥説話、或は大雅の生民の、周の先祖后稷が寒氷の上に棄てられて、鳥が来て翼で之を覆ふた説話が見える。

凡そ鳥には鶴、鸛、晨風(隼)鷗、雉鳩、鳩鳩、雛、脊令、黃鳥、鷓鴣、桑扈、桃蟲、鷺、鶉、鴻、鳧、雁、鴝、鵲、雀、燕、雉、烏、鶉、鷄、鳶、鴛鴦、鷓、鷺、倉庚、鷺(和名鳳五郎といふ由)などが出て來るが、何れもその性狀をとつて夫々比興に用ひられてゐる。脊令が忙しく飛びまはるは、兄弟の急難に赴くになぞらへ、(常棣) 幕門の楠に萃る惡聲の鶉は、不良なる人を興し(幕門) 他鳥の子を取りくらふ鴟鴞は己が護る室家ををびやかす者に喩へ、(鴟鴞)(舊説周公が三監の罪をせむる歌といふ) 鶉は奔々として性猛く惡しき人を云ひ起し(鶉之奔々)、鴛鴦の梁にむつまじいのは、我を棄てし人を反興する、(白華) 鶉が巢をかければ鳩が之に住むと、姫の興入を興するのも、鳩鳩がその子を等しく愛撫するを以て淑人君子の其儀一なるを興するもの(鳩鳩)、皆その鳥の性として知られてゐたものであらう。鳩鳩の詩の鄭注に、この鳥は朝は上から子を養ひ、夕は下から子を養ふ云々といふのは己に穿鑿にすぎたものであらうが、左傳(昭公十七年)に鳩鳩氏は司空。杜注に鳩鳩は平均、故に司空氏となつて水土を平にす、といふ。この

鳥が子を同じ様に可愛がるといふことは、古くから云はれた事であらうから、かくこの詩を解するのは、一見附會の様に見えて、あながちさうでもあるまい。さういふ鳥どもの性狀は、古の人には馴染深い常識であつたらう。嚶として鳴く鳥は友を呼ぶ聲、鶯として雉の朝に雉なはつまを呼ぶ聲と歌ふ古人の心は優しい。雉と婚禮については前々號東蕪考にて觸れた。鳥を以上の様なそれらの性狀に依つて比興に取つたほか、特に氣附くのは、古の人が鳥を見て、その翼で自由に飛翔し、又疲れれば自由に林に集つて楽しく囀るを見て、人の世に生れて逃れるすべない苦しみを負ふ民人が、如何に羨ましく思つたらうことである。

小鳩は鳴いて、翼はためき天にのぼる。私の心は憂へ傷み、亡きひとを思ひつゞける。夜の明けるまで寝もやらず、父母のこと思ひつゞける。(小宛)

かの春令せうれいを見れば、忙はしく鳴きつゝ飛ぶ。我ら二人もろともに、日に月に力めすゝみ、夙に興き夜半に寢て、われらの父母を辱かしめまい(同)。

囀る桑扈は、場ばに來てもみを食ふ。哀しいは病びとやもめ、ぜひも無く獄じよにゆく。粟もみを撮とつて出てトふも、只如何にせば生きてゆけやうと。(同)(場は麥打場)

生き難き亂世にあつて、兄弟互に戒めて禍を免るゝ詩である。鳩の空に上るは、その身の自由さを羨み、春令の忙しく飛び交ふは兄弟の互に難に赴くを興し(常棣の詩と同様)、桑扈が場のもみを啄むは、食べるに道もない人間の悲しさを反興する。四月の詩は國亂れ民苦しむ時、南國に行役する己が身を嘆く詩である。そこで

鶉わしならねば、鶉ならねば、羽根うちて空にも飛びかねつ。

鱈てんならねば、鮪いならねば、潜んで淵にも逃れかねつ。

「以て哀を告げる」と歌ふのである。柏舟の歌の終りに

月日も光蔽はれて、などわが上を照さざる。心の憂澁すがさる、衣きつけしにも似たるかな。ひとり思に耽りつゝ、
飛び立ちかねつ鳥ならぬ身は。

といふのも又同じである。或は王事息むことなき苦しみを歌つて

肅々しよくととぶ鴝この鳥、柳もの林に集りぬ、きみの御用はやすみなく、畑のきびも藝わざかかぬる。親御は何をおたより
に。仰げばとほい蒼ざらよ。いつか定まる日も有るか。

と、我身を嘆く。毛鄭の説に鴝こに後趾なく、木にとまり得ぬ鳥が、今この木にとまるのは、安けきに居る可き民の、
却つて征役に従ふを興すといふも、さうまで考へなくとも、鴝こ（雁に似たもの）の群れの野をさすらふを以て我身を
比へたと見てもよからう。四牡の詩に

飛びかふ雛ひなひらくと、飛び立ち上り飛び下り、柳もの林に集りぬ。君がみことにやすみなく、父養はむ暇もなき。

といふのも、同様な歌が小雅に入つて来たものだ。雛ひなは或は一宿の鳥といひ、或は雛は祝鳩、左傳（昭公十七年）杜
注祝鳩は鶉鳩、孝行な鳥とも云はれる。だが又曠野に鳴きつゝ、果てない旅を續ける鴻雁は、又果て知らぬ征役に出
づる者の比興にふさわしい。「鴻雁于飛、哀鳴替々」と、「野に劬勞する」征人を興したのである。（鴻雁）

獸の名も数多い。熊、熊くま、豹、豺虎、兕けし、虎、狼、狐狸、貉、貍（貉の子）、獐、兔、鹿、豕、羊、牛、馬、鼠等
々。こゝに獐は木登りの上手なもの（角弓）、兕けしは狡いもの（兕けし）、狐は淫なるもの、夫々の性情によつて比興に用ひ

られる。

洪水の梁にぶら／＼と、何を求めて雄狐の、裳の無いのが氣にかゝる。(有狐)

梁は魚のゐるところ。魚をねらつてうろつく雄狐の比へは云ふ迄もない。(魚の項参照)又「漸々之石」の不可解なこ
とばたる「豕あり蹄白く、川波を蒸みて渉る。月みれば畢にかゝりぬ。又しても雨しげからむ」の句も、豕について
古人の知つてゐた性状であらうかと思はれる。(易に坎を水となし、豕となすことは注意される)牛羊を歌つた歌に、

誰かいふ爾に羊なしと。見よ三百のこの群を。誰かいふ爾に牛なしと。見よ九十のこの特。爾の羊來る、その角
濺々。爾の牛來る、その耳濕々。

或は阿に降り、或は池に飲む、或は寝ね、或は訛く。爾の牧人來る、糞になひ笠になひ、或は籬背に負ひつ。毛
色も三十、供へむ牲に事かゝじ。(無羊)

又「君子手役」の詩の

君はいくさ。いつの日か歸り來まさむ。雞は時に棲みて、けふも亦日は暮れぬ。牛羊は小屋に歸りぬ。君はい
くさ、あゝいかで思はざらむ。

君はいくさ、久しけれいつ又逢はむ。雞はとやに靜まり、けふも亦日は暮れぬ、牛羊は小屋に戻りぬ。君はいく
さ、あゝ餓え給ふこと勿れ。

はことに美し。

馬に關する名稱の多いのは殆ど驚くばかり、その毛色の僅かな相違によつて、一つ／＼異なる名稱をもつ。それは車

に關する部分々々の名稱が實に煩はしいのと同じく、當時の生活にそれ程深い必需品であつたからである。同時に考へてみると吾々は今日、馬の毛色による呼び名を殆ど使はなくなつて來てゐる。少しく前迄は、あをとか、鹿毛とか、栗毛とか、常識として日常使はれたことばであつたらう。

魚

魚はめでたいものである。

支那では吉慶有餘の餘の字と普通を以て魚の模様が慶事に用ひられる。しかしそれは只普通ばかりだとは云へない。そのよる所の遠いことを思ふ。あの潑刺たる魚の姿、水中に鱗をかゞやかせて、悠々と群れ遊び、或は水藻の蔭に靜かに安らふ魚の態は、莊子ならずとも、何と楽しく憂なげに見えることか。「王靈沼に在せば、おゝ^み扱ちて魚躍る」の文句は（靈臺）まことに聖王の御世をたゞふるに適しい。

魚は藻ぐさに、太きかしらよ。王は鎬京に、樂しみて宴し給ふ。（魚藻）

南に嘉魚。さわにみち、ゆらにゆらめく。うま酒のあるじに有れば、嘉賓と宴げし樂しむ。（南有嘉魚）
は何れも君子の酒宴を歌ふ。魚麗の詩の「魚、留にかゝる、鱧」の歌も亦酒宴の豊けさを象徴する。

魚の夢は又豊年の兆でもあつた。（後述斯干）

さすればめでたき人を魚に比へるのも亦不思議はないのである。「新臺」の詩は舊説に衛の宣公が河の畔に新臺を設けて、公子伋の爲めに娶つた婦人を、その嫁し來る途に要して自ら奪つたのを刺る歌といはれた。

魚網に、鴻がかゝつたとき。やさしい殿を求めて來たに、飛んだ威施せしにつかまつた。

が、之は已に魚と婚姻、魚をとる事を以て結婚の象徴、或は男女の關係の象徴とする興の一つと考へる可きである。「九戩」の詩は、東國の人が去りゆく周公に名残りを惜しむ歌とされるが、どうも今少し違つた情景を想ひ浮べ度くなるのである。

細網に思ひがけなや鱒と魴。きみに觀みふたるよろこびは、めでたき龍の御裝束。

鴻かづ飛んで磯づたひ、歸らば貴き御身の上、こなたに二た夜のおん泊り。

鴻飛んで陸づたひ。君は再び見えまじ、こなたに二た夜のおん泊り。

かうして拜んだおん姿。お連れ申すなこの公きみを。悲しい思はいかばかり。

魚はめでたきもの、それを食ふは楽しい事である。匪風の詩の「誰能亨魚、漑之釜鬻」も、魚を亨る人あらば、その爲めに釜を漑くがんと、戀しき西の故郷へ歸りゆく人を羨み、せめて好音を懷ならんとする心である。その魚を食ふことが、又女性を得る事に比へられたと思はれる例はいくつもある。先にあげた「何彼襍矣」の詩も綸もて魚を釣るを以て二姓の結婚に比へた。竹竿の詩も淇川に釣ることを以て、遠き人を思ふ歌と考へられた。「有狐綏々」の歌は魚をねらふ狐を以て、女を誘ふ男に比へた。同様な文句は「南山」の詩にもある。

南山はすくく、雄狐はぶらく。魯へゆく道は平かに。齊の姫御はこゝから嫁つた。一旦嫁に行つたものを、なぜそのやうに懷ふのだ。

と已に魯に嫁した妹に、曖昧な行があつたといふ齊の襄公を刺る歌と傳へられる。魯は微弱な小國であり、齊は大

國である。従つて

梁にかけたるやぶれ筍、魚は太いぞ。齊の姫後の御嫁入り。お伴の衆は雲のやう。(敵筍)
は魯を侮つた文句であらう。もしそれ衛門の詩に至つては魚と結婚の關係は一層顯著である。

冠木門のもとでさへ、住めば氣樂に住めるもの。流れる泉の水にさへ、腹の減つたはいやされる。

何で魚を食はうとて、黄河の魴には限りやせぬ。何で女房を貰ふとて、齊の姜女にや限りやせぬ。

尙こゝに注意す可きは飢といふ字がこの詩にある通り、飢、又は調飢(朝飢)は男女の渴思に屢々喩へられる。候人の詩はわかり難いものであるが前にあげた聞一多氏は、上述の如く、蠓蝻の詩を論ずると共に、候人の飢の字、鵜が梁にゐるといふ句、虹が朝に墜るといふ句によつて、又男女の間の歌である事を指摘して居るから、その上一語をも加へる要はない。たゞ候人の解釋は氏の説にはやゝ従ひかねる。試みに自分の考によつてみれば

一、彼候人兮。何戈與設。彼其之子。三百赤芾。(赤芾は赤き膝蔽ひ)

警固の衆は戈に設。あれなるお方は三百の、赤芾つけたその一人。

二、維鵜在梁。不濡其翼。彼其之子。不稱其服。

梁に居る鵜の魚とらぬ、濡るゝがいやか主さんの、見事な服もあだなもの。

三、維鵜在梁。不濡其味。彼其之子。不遂其嬖。

梁に居乍ら魚とらぬ、鵜は味も濡らさずに、ぬしは、逢うても下さらぬ。

四、蒼兮蔚兮。南山朝隲。婉兮孌兮。委女斯飢。

思ひがませばあの山に、朝から虹が立ちのぼる。可愛いや、乙女のやるせなさ。

梁は魚を捕ふる仕かけである。それは又家常の生活になくてならぬものであり、家を保つてゆく婦人の大切なものでもあつたらう。と同時にやはり魚といふものゝ意味も併せ考へていゝと思ふ。詩の中に屢々棄婦の詩に、自ら去られたあと、大切な梁を別の人に荒らされる事を憂ふる詞があるのである。邶風の谷風は新らしき女に見かへられて、古き妻の棄てられてゆく歌である。そこには我が去られてゆくあとに、「我が梁に逝く母れ、我笱を發く母れ」と未練を出しても見るが又「我躬すら聞れられず、我後を恤ふるに遑あらむや」と悲しく嘆く棄婦の怨みである。小雅小弁の詩は同じ句を取り入れて疏んぜられし者の哀しみを述べる。何人斯の詩は殆ど何の詩か解らぬやうに見える詩であるが、やはり「胡ぞ我梁に逝く」云々の文句があつて、

何たる人ぞ、飄風のやうに、北とも見えす南とも、そなたの心定めなき。なぜに私の梁にゆき、私の心をかき亂す。

と、定めなき人ごゝろを風にたとへ（終風の詩と同じ）、それでもせめて「今一度は來れかし」と待ち望み、もしも己を信ぜぬならば三物（豕犬雞）を出して詛ひもしやうといひ、長い歌に思のたけをつらねて、常なき人の心をせめるもので、之を蘇公暴公の事と解する舊説は甚だ信じ難いもので、やはり谷風の詩と極めて近いものと思ふ。

尙白華の詩も、可成り問題が多いが、「鴛鴦は梁にゐて、片羽をさめて依りそへど、かの人のつれなさ、いつか移らふ仇心」といひ、又貪欲な鶯は梁に居り、潔き鶴は林にあり、といひ、且つは白華菅兮、白茅束之と、束薪の興ある

こと、及び英々たる白雲の菅茅に露をくを以て、情しらぬ人の心を怨む語ある事などで、之はやはり寵を失つたものと詩と考へられるのである。

蟲

さて餘りに長くなつた。この邊で急ぐことにしよう。蟲は季節を告げるものである。寒くなり際の蟲の聲は今も昔も人の心を傷感させたであらう。

五月はたをり股すつて鳴けば、六月羽振る莎雞。七月野になき、八月は宇に、九月戸口に、十月は床に、いつかきてなく蟋蟀。(七月)

蟋蟀せりせりす家ぬちに鳴きて、あゝ歳も暮れむとすなり。今にして樂まざれば、いたづらに月日は除らむ。(蟋蟀)

つゆむし鳴いていなごとぶ。逢はでゐる間のうさ辛らさ。(草蟲)

蝗は農村に馴染み深いものである。その蝗の大群をなすことは我國では見られぬものである。群なす蝗、それは子孫衆多を無上の幸福とする人々の、一族の繁盛を祝するのにこの上ない比へである。「益斯之羽、誦々兮」とは、子孫の振々と盛なるを祝禱するに用ひられた興である。(益斯)。又蝗の夢を見ることは魚の夢と共に(原文に衆維魚矣とあり、衆は蜾、維は興)。豊年の兆とする。熊羆の夢が男子出生、虺蛇の夢が女子出生の兆(斯干)とすると共に古の夢占ひである。

蠅は昔から多かつたらう。營々たる青蠅は讒言をなす者多きを興し(青蠅)、又曉方の蠅の羽音は草深き田間の、

男女の伴寝の夢をおどろかしさへした。

「くだかけ鳴きぬ。夜はあけぬ。」「何の雞かよ。蠅の聲」。

「東明りぬ。朝は來ぬ」 「何の夜明けよ。月のかけ」。(鷄鳴)

その「蟲飛ぶこと蕤々」たるに、甘寝の夢を破られてきぬくの別をする戀人たちである。

久しく征役に従つて、歸り見る家のうちには伊戚(わらじ虫)の匍ひ歩き、戸口に蠍の巢を張るは、まことに淺茅が宿の思ひであらう。悲哀ふかき東山の歌はまことに千古の絶唱である。

我東山にゆきしより、久しくなりぬいつしかに、今ぞ歸らむ道すがら、雨さへいと降りしきる。「軒に匍ふたるからす瓜。とこ虫走る家のうち。蜘蛛は戸口に巢をはりて、畑のあぜには鹿通ふ。鬼火の燃ゆる夜の道も、何ををそれむなつかしき。(東山)

その行役に出でし身はまことに桑野にうごめく蠅にも似て、車の下に佗しく辛いまろびねを續けて來たのであつた。(同上)

美人の卷髪を喩へて蕤の如しといひ、楚々たるその白衣を蜉蝣の羽に比したる古の人は、又「碩人」の詩に於て莊姜の美しさを「手は柔荑の如く、膚は凝脂の如く、領は蝤蛸の如く、齒は瓠犀の如く、螭の首、蛾の眉」と形容した。柔荑は白くしなやかな手を、凝脂は白く豊艶なる膚を、瓠犀は可愛い、白い齒並びを、蛾は秀でたその眉を、螭首は廣くしつかりしたその額を、そして領のすき透るやうな柔かな美しさは、蝤蛸のからだを以て比へたのである。たとへば蠶のうすく透きとほるやうな柔かさ、それを以て美人の領に比へたことは何と生き／＼した形容であらう。

さて此の様に、一木一草、小きき昆虫に至るまで、深く生活の仲間に入つて生きてゐた素樸な古の生活、凡て物の生々として力溢れる有様をこそ美しと見た健やかな古の人の心を思ふ。それと共に、翼ある鳥、憂なき魚を羨んで、生きるに辛き世に生れ合せた不幸を嘆き、み空に列る星すらも我につれなき形と見ねばならなかつた民の嘆きは三千年後の今日の支那も果して異なる所があらうか。天をおそれ、山を蔽ひ、日食におびえ、雷電にふるへた古の民の心は敬虔と神秘にみちてゐたらう。それと共に、その民の上に立つて、天に代つて、星斗燦然たるにもまがふ地上の法度典章をしき、民を教へ世を治め、自ら常にその身の徳を省みて、定めなき天命を永く子孫に傳へんと戒めた周朝の剛健壯大なる政治の精神も亦詩經の中に見事に現れてゐるのである。

以上は凡て詩經に現はれてゐるものゝみに觸れて、古の人の山川草木、鳥獸蟲魚、日月星辰に對する感じ方考へ方を述べて見た。もとより詩經の詩には、自然そのものを詠ずるを目的としたものはない。それは多く比興として用ひられてゐるので、それが如何なる意味の比興であるかを考へて、そこに古の人の自然に對する心持を察することが出来るかと思ふ。

附記 一、詩經の解釋は異説さまざまである。以上に掲げた引例の詩の譯は、たゞ自分の解釋であつて、舊説には合はぬものが多い。従つて詩の原文を同時に掲げて充分なる注釋を加へて、これらの解釋の根據を示して參照に資す可き筈であるが、それには無数の難しい活字を作らせねばならず、印刷の煩を厭ひ、且つは豫定よりも長すぎた紙數の節約の爲めに之を省いた。又一篇の詩の全部を掲げることも同様な理由で控へて、只一二句だけをあげて、篇名を注して參照の便に具へた。但し以上の中にも尙疑問の點は多い。自分でも更に考を廣げてゆくつもりであるが、尙々御教示を得ば幸である。

二、尙勝手乍らお斷りしてをき度いことは、昨年（前々號）本誌に載せた函詩考は、幽雅函頌といふことについて、今では餘程考が變つて了つた。將來何かの場合に書き改める。